

アイヌ口承文芸にみる 神々の姿と北海道の樹木

安田 千夏

要旨

北海道の先住民アイヌが神である動植物をどのように考えているかについて、アイヌ口承文芸資料を通して考察することが筆者の研究テーマである。樹木神についての資料を見ると、様々な樹木の神格は同列に位置づけられているのではなく、明らかに樹種により違いが認められる。前段では、神格が高いとされる樹木神はどのような樹種であるのかを考えるために伝承の構成要素に注目した。そしてイヌエンジュ・ハルニレ・ドロノキの伝承を取りあげ、物語の梗概に要素がいくつ含まれるかについてみることにした。

後段では、伝承にみられる神格の違いについて考察した。イヌエンジュとハルニレの伝承は、樹木神が主人公を助けるという重要な働きをする危機救済型伝承であり、同タイプの伝承は、これ以外にはエゾマツ・カツラ・ミズナラについての採録例があると確認できた。それに対し、一見このパターンに似ているように見えるが、実は決して神格が高い樹木として扱われていないのがドロノキの伝承であった。ドロノキはヤナギ科の先駆樹種であり、森の変遷における役割が前段で述べた樹種とは根本的に異なる。それが伝承パターンに現れた違いの要因になっている可能性を提示した。

1 はじめに

北海道の自然を語る際に、先住民アイヌがどのように自然を捉えていたかについて理解することが重要な視点であるということは論を俟たない。アイヌは自然界や暮らしの中にある有形無形なものを神と考え、動植物もその中では重要な信仰の対象と位置づけていた。アイヌ口承文芸の散文説話では、ある家系と特別な縁でつながりを持った神に対して、その家系の人々は儀式の場においてイナウ^(注1)と呼ばれる供物や酒を一番先に捧げ、子々孫々に至るまで守り育てられるようにと願うものであったと語り伝えている。アイヌ口承文芸は多くの場合架空の物語世界であるが、そこに描かれる神々の姿は、自然と人間との関わりを考えるうえで多くの示唆を与えてくれている。数多ある神々の中で樹木神を例にとった場合、アイヌ

口承文芸における描かれ方を見ると、明らかに樹種によって神格の違いが認められる。どのような特色をもつ樹種の位が高いとされ、また低いと見なされて来たのか。この問題を実際の自然界における樹木の植生や樹相を見る中で考えるというのが、ここ近年における筆者のライフワークとなっている。

筆者は2007年と2008年に事業化されたアイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブス（独立行政法人青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成金による。以下アイヌ語アーカイブスという）において、資料活字化を担当する外部スタッフ参加を通して、日高地方の神謡や散文説話について多くの知見を得た。その資料の一部及び文献資料から物語の梗概を紹介しつつ、本論を進めていくことにしたい。

なお、本文中のアイヌ語については、カタカナ

注1 イナウ：木を素材として作られた木幣。材料としてはヤナギ類やミズキの他、捧げる神や意味合いによって様々な樹種が用いられる。神への供物となる他、イナウ自体が神として祀られることがある一方で、単に装飾の意味合いで用いられることもある。形状は地域や用途によって多種多様である。

表記の後にローマ字簡易音素表記を（ ）で記し、必要に応じて日本語訳を「 」で付した。

2

アイヌ口承文芸にみられる 伝承の構成要素

アイヌ口承文芸のパターンを整理していくと、樹木神が重要な役割を担う物語の中に、ストーリーの展開が共通するひとつの形式が見えてくる。伝承によって若干の差はあるものの、概ね次のような要素を持っていると理解できる。

- ①樹木神のこの世における姿は木としての実体であり、しかも「立派な木」である
- ②不思議な力を発揮して主人公（人間）の危機を救う
- ③夢の中などで、意思を持つ存在として主人公やその縁者と会話をする
- ④樹木神を祀ることで主人公の家系は末代まで守られる

この要素を持つ伝承3編について、その梗概を見ていくことにする。①～④までの要素を示している部分には番号及び下線を付した。

2.1 イヌエンジュ神の伝承(アイヌ語アーカイブス 2007, 伝承地域：日高地方)

(梗概作成は筆者、以下同)

私は人間の女の子で、幼い頃から兄とふたりきりで暮らしていた。年頃になった頃、兄は「おまえには、赤ん坊のときに両親が決めた許嫁がいる。その家にひとりで嫁いでいきなさい」といわれ、仕方なく出掛けていくことにした。ひとりで歩いていく途中に、①川辺の砂原に見たこともないような立派なイヌエンジュが立っていた。その木を触りながら周囲を歩いていると、突然木の陰から、うす赤い肌の色をした気味の悪い男が現れた。私が驚いて逃げ回っているうちに、男は大蛇に姿を変え、私をつかまえようとして襲いかかって来た。②その木を離れて逃げるのは恐いので木を廻りながら逃げると、私を襲おうとして木にかみついた大蛇は、そのままの姿勢で死んでしまった。私が泣きながら許嫁の家に行くと、その家の人たちは私を家に招き入れて、今までのいきさつを話すと無事を喜んでくれた。翌日にはその家の息子たちが大蛇が死んだ場所に赴き、悪神が二度と蘇らないように祈りつつ儀式をおこなった。そしてイヌエンジュの神は樹皮のはがれた痛々しい姿をしていたので、感謝の祈りを捧げて祈って来たといっ

た。そしてそれから、その家の許嫁である息子と結婚した。③夜にはイヌエンジュの神が夢に出て来て、ことの顛末を教えてくれた。それは大蛇が私を好きになり、嫁にするため命を取ろうとしたのだが、イヌエンジュの神の助けで無事に生き延びて嫁ぎ先に辿り着くことができたという内容だった。その後兄のところに無事を報告しにいくと、心から喜んでくれた。そして大蛇にあやつられて妹をひとりで嫁がせたことを泣いて後悔した。それからは兄も結婚し、お互いに子どもができて行き来をしながら幸せに暮らした。④子どもたちにはイヌエンジュの神に祈ることを忘れずに暮らすようにいい置いて、私は天寿を全うするのであった。

2.2 ハルニレ神の伝承(アイヌ語アーカイブス 2007, 伝承地域：日高地方)

我々はパナウンペ (panaunpe) とペナウンペ (penaunpe)。男ふたりの兄弟だが、どうして自分たちが生まれて来たのかもわからずに暮らしていた。道具というものを知らなかったので、クマやシカなどの獲物を獲るときはげんこつで殴り殺し、食べた後の骨は何の儀礼もせずそのまま捨てていた。ところがある日、見たこともないような大きなクマが我々に襲いかかって来て、げんこつで殴っても効き目がないので、たまたまに逃げ出した。山を越えて何日も逃げ続ける途中、ペナウンペはいなくなってしまった。パナウンペ (以下「私」) はひとりで逃げ続け、①大きな湿地の真ん中に立派なハルニレの木が立っているところまで来た。②木の神様に助けを求めながら湿地を渡り木に登っていくと、追いかけて来たクマは木の下まで来ると動かなくなり、死んだようだった。恐くて木の上でふるえて泣いていると、③木の上から木の神様の声が聞こえてきた。「パナウンペよ、よく聞きなさい。おまえは人間ではない。昔、国造りの神が国を造り終えてタバコを2服飲んだ。その燃えかすがそのまま朽ちてしまうのは惜しいので、神の力でおまえたち兄弟の姿に造りあげたというわけなのだ。しかしおまえたちは道具を作るということを知らず、何でもげんこつで殴って殺すので神様たちが怒ったのだ。山の下端に住む位の低いクマ神が、山や海の悪神の力を借りて、一頭の大きなクマの姿に化身した。そしておまえたちを襲ったのだが、それは私の力で罰しておいた。これからは道具を使って獲物を獲り、その骸はきちんと神の国に送り返す儀式をするようにしなさい」。そしてそれから私はハルニレの神の教えに従い、東のほうにいったところにある平

原に家を建て、そこで暮らした。人間が通りかかると家に泊めてハルニレの神の教えを伝え、徐々に仲間が増えて大きな村となった。私はそこで結婚し子どもができ、幸せに暮らしたのだった。

2.3 ドロノキ神の伝承(浅井, 1972。採録地域：道北)

私はオタスツ (otasut) という村に住む男だった。ある時、川上の村で毎晩一軒の家から人がひとりずついなくなっていくという噂を聞いた。そこでその村に出掛けて行って、村の真ん中にある村長らしき人の家に着くと、家に招き入れられた。家には若い娘と老夫婦が住んでいて、家長である老人がこういった。「この村では村人が順にいなくなり、もう村人の半数がいなくなりました。今夜はこの家の番だから、あなたは逃げてもっと川上の家に行き泊まるといい」。しかしそれを断り、その家に泊まることにした。この家に来るまでの間にドロノキとシラカバの林を通り、ドロノキの丸太を背負って来て外に置いておいたので、家の人が寝静まってから、それを家に運び込んだ。そして一晩中、ドロノキの歌を唄いながら樹皮を全部剥いてしまった。それから眠りにつくと、③ 夢に人間なのか神なのかかわからないものが私の前に座り、こういった。「オタスツの人よ、私はドロノキの主である。私の仲間はたくさんいるが、どれも悪い心の持ち主ばかりである。人間の村を見ると、心の美しい者ばかりなので私はうらやましくなった。そこで人間の魂を取って来て村を作ろうと思い、一晩にひとつずつの魂を取っていたのである。しかし今日オタスツの人が来て、私は丸裸にされてしまった。④ これからは悪事を働かないので、神の国に帰れるようにして欲しい。そうしてくれたなら、あなたの守り神となるつもりだ」。翌朝になると村人たちが集まって来て、私に感謝していろいろなご馳走を背負わされ、自分の村に帰って来た。それからは何の心配ごともなく暮らしたのであった。

3 分析と考察

3.1 樹種の同定

チクペニ (cikupeni) 「イヌエンジュ」とチキサニ (cikisani) 「ハルニレ」については、アイヌ語の原文で樹名が確認できた。しかしドロノキの伝承は日本語のみで書かれた資料であり、アイヌ語の原文は確認できていない。筆者は日本語訳のみでアイヌ語の原文がない資料には誤訳が含まれる可能性があるため現時点では整理の対象外として

いるが、この資料には明確にアイヌ語で樹名が「クルンニ」と明記されており、樹種の同定が可能な資料と判断した。

樹木のアイヌ語名称が記録された文献を参照すると、「クルンニ (kurunni)」はドロノキのアイヌ語名称であると石狩・十勝・足寄で採録されている(宮部・神保, 1893; 知里, 1953)。道央では「ヤイニ (yaini)」という名称で知られている当該樹木であるが、この伝承は新十津川で採録と注に明記されているので、確かにドロノキに同定できると判断した。

3.2 危機救済型伝承について

さて、イヌエンジュとハルニレについては、主題が主人公を助けるという重要な働きをする危機救済型伝承と判断できる。構成要素のうちハルニレの伝承では④の要素を欠くが、「ハルニレの神の教えに従って幸せに暮らした」という部分はその要素にあたることを示唆している。

イヌエンジュとハルニレ以外の樹種で、既に公開された口承文芸資料の中にこのタイプの伝承を探すと、エゾマツ・カツラ・ミズナラについて確認された(写真1)。ちなみに主神が樹木神ではなく別の神である場合もこれに含めた(アイヌ無形文化伝承保存会 1983「ペッキタイの村長の次男の話」、採録地域：道北)。

また、このパターンのみが神格が高いことを示

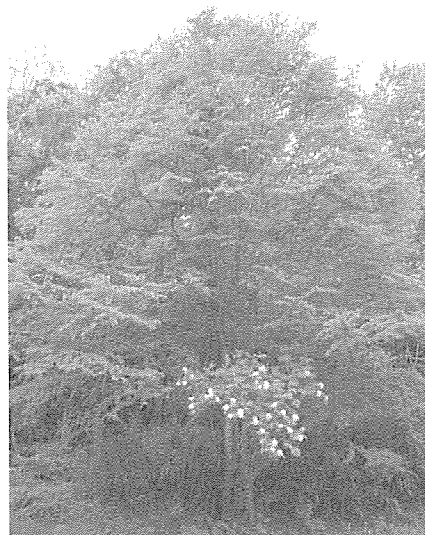


写真1 高い「立派な木」がカツラ、手前で白い花をつけているのが低木エゾニワトコ。危機救済型がみられる樹種は高木であることが重要な条件のひとつとなる。

す樹木神の伝承というわけではなく、文法的に「一人称叙述体」、すなわち植物の神が自ら物語る形式がそれにあたるとした論考がある（本田，1997）。そこではハリギリの神格が高いとされている。

3.3 危機救済型以外の伝承

ドロノキについては、イヌエンジュやハルニレの伝承と似ているようで、決して神格が高い神として扱われていない点が特徴的であった。冒頭で設定した構成要素のうち2つの要素が含まれてはいるものの、この伝承には「主人公を救う」という主題がないばかりか、人間に対して禍をなす悪神的な存在として描かれている。じつはこうした悪神も神であることには変わりがなく、心を入れ替えさえすれば守護神になり得るという例のあるところが、口承文芸資料にみられるアイヌの神に対する考え方の大きな特徴である。例えばクマ神の伝承を例にとった場合、すべてのクマ神が神格の高い存在として位置づけられているわけではなく、山の下の方に住むクマ神の位は低い。そして人間に対して悪いふるまいをする悪神的存在として描かれている。こうしたクマ神は罰せられて二度と蘇ることができないという展開が多い中で、罰を受けたクマ神が反省し、心を入れ替えて主人公の守り神になるという伝承の採録例がしばしば見受けられるのである。本稿で取りあげたドロノキ神の性質を見る限りにおいてはこの位置づけに近いといえる。

ドロノキはヤナギ科の高木である。生育するために太陽光の要求性が高い樹種を陽樹と呼ぶが、その中で荒地にでも真っ先に生育して林を形成するものを先駆樹種と呼ぶ。ドロノキは代表的な先駆樹種として知られている樹種である。しかしやがて太陽光の要求性が低い陰樹が日陰の林床に芽を出して生育し、ドロノキを追い越して枝を広げる。すると太陽光を遮られたドロノキは徐々に枯れていき、やがては森を育てる土壌の栄養分となる（写真2）。したがってドロノキは「危機救済型」がみられる神格の高い樹種とは、高木であるという部分が共通するものの、森林における役割が明らかに異なっており、神格が高い樹種とは一線を画する存在である。その実際の自然界における性質の違いが、アイヌ口承文芸にみる樹木神の神格に反映されていると筆者は考えてみた。その視点でヤナギ類と同様に先駆樹種であるハンノキ類やシラカンバの伝承を見ても、神格が高いと考えられる伝承が多くは採録されていないことがわかった。

今日的に使われる先駆樹種や陽樹、陰樹などの



写真2 まれに自然林の中でドロノキが林冠に顔を出し、巨木に生長することがある。しかし台風が直撃すると取えなく倒れてしまった（白老町ポロト自然休養林にて）。

概念がアイヌ口承文芸の中で明確に語られているわけではもちろんない。しかし「物語中に登場する木は何故この樹種なのか」という疑問を突き詰めていくと、豊かな物語世界を生み出したアイヌの人びとは、当然こうした問題を熟知していたのだろうとしか思えない面が見えてくるのである。

4 樹木神の輪郭

アイヌ文化において神格が高いとされる樹木神の条件のひとつが「立派な木」とであると本稿では述べた。実際に立派に成長した木は「巨木」に近い意味を持つシッコロカムイ（sirkorkamuy）「大地を守る神」、シランパカムイ（siranpakamuy）「大地を掌握する神」などと特に呼ばれ、樹名とは関わりなく信仰の対象となる。冒頭で説明した口承文芸の描写にあるように、実際の儀式においても冒頭で酒を捧げられる重要な神に名を連ねて祀られる事例が報告されている（アイヌ民族博物館，2000 ほか）。しかし巨木であればあるほど神格が高まるのかというと、そうとはいきれない。先駆樹種の問題も含め、巨木に生長する樹種がすべて神格が高いとされているわけではないのである。それではそのような樹種が神格が高いと考えられていたかについての問題は、有用性が高い、もしくは人の力が遠く及ばない不思議な能力を発揮するなどの条件を加味して考察していく必要があるだろう。アイヌ独特の価値観のもとにこうした樹木神の神格は位置づけられていったのではないかという予測を立てつつ、今後も様々なタイプの伝承についてひき続きこの問題を検討していきたい。

口承文芸資料を研究対象にするということは、

どうしても記録されたものに限られるという制約がある。その上にアイヌ語の植物名が確認できる資料ということになると、その全体像を把握するのは難しい。しかし確実に同定ができたものの中から、ある程度の傾向を読み取ることは可能であろう。本稿は決してすべての資料を網羅したわけではなく、新たに報告された資料の中から検討すべき課題を抽出するに留まった。しかし、こうした作業の積み重ねによって、その全体像に僅かながらでも近づくことができたと考えている。

5 おわりに

かつてのアイヌにとって樹木は、神という崇拝の対象ではあるものの、不可侵の存在であるというわけではなく、日常生活に欠かせない物質を提供してくれる身近な存在であった。アイヌはオヒョウやシナノキなどの樹皮を加工してアットゥシ (attus) という樹皮衣を作る伝統がある。その樹皮を剥ぐときには、木が死なないように一部しか剥ぎ取らないという話がつとに知られている(更科, 1976 ほか)。しかし実際の聞き取りデータを整理していくと、それとは正反対に聞こえる話が散見するのである。筆者が聞いた話によると、それは「樹皮を剥ぐときにはすべて丸剥ぎにし、木は伐り倒し乾かして薪にする」という内容であった。正反対に聞こえたというのは、当時の筆者にとって木を伐ることは木の死を意味すると考えていたからに他ならない。命をもらった以上は無駄なく利用することが大切という教えだと解釈していた。しかし今は違う面が見えている。自然科学の分野では、植物はモジュール体^(註2)と説明される。あたかも部品を積み上げたような構造の生命体であり、例えば伐り倒しても根が生きているので再生することができるのである。そんな木がほぼ確実に個体としての「死」に至るのが、樹皮を剥いで光合成に必要な水を樹幹に通す道を断つことであると知った。そうであるとしたならば、正反対に思っていた樹皮を剥いだ後の処置についての二通りの方法は、どちらも木の立ち枯れを防ぐ方法、即ち木を死なせるためではなく生かすための方法であったということになる。この例がそ

うであるように、樹木に関する科学的な分析が、アイヌの古来の知恵をより深く理解するための一助となる場合がある。

もちろんこの一連の話は、伝承者がそのように語った資料が存在するわけではない。しかし筆者はそれ以来どうしても、森で株立ちになって再生するオヒョウを見ると、会ったことのないアイヌの先人と対峙するような感覚を覚えるようになった。記録として残されることのなかった森と人との関わりの歴史を、木が語っているように見えるのである。

引用文献

- アイヌ民族博物館編 (2000) ポロチセの建築儀礼：伝承事業報告書. アイヌ民族博物館, 189 pp.
浅井 亨編 (1972) だろの木の主. 日本の昔話 2 アイヌの昔話, 34-38 pp, 日本放送出版協会. 271 pp.
アイヌ無形文化伝承保存会編 (1983) ペッキタイの村長の次男の話 アイヌの民話 1, 31-65 pp アイヌ無形文化伝承保存会, 225 pp.
更科源蔵・更科 光 (1976) コタン生物記 I 樹木・雑草篇. 法政大学出版局, 265 pp
知里眞志保 (1953) 分類アイヌ語辞典 第1巻：植物編. 日本常民文化研究所, 394 pp.
宮部金吾・神保小虎 (1892) 北海道アイヌ語植物名詳表. 東京地学協会報告別刷, 14-1, 40 pp.
本田優子 (1997) アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 3, 23-40 pp.

※上記の文献以外に、アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブス 2007, 2008 より物語の梗概を作成し記載した。本稿で取りあげた資料の一部音声及び梗概は、アイヌ民族博物館ホームページ (<http://www.ainu-museum.or.jp>) で公開されている。

※本稿は、第35回日本口承文芸学会大会 (2011年、神戸市) において発表した内容の一部を再構成したうえで執筆した。

安田 千夏 (やすだ ちか)

1994～1999年、財団法人アイヌ民族博物館 (白老町) 学芸員。育児のため退職後、同博物館の外部スタッフとしてアイヌ語音声資料活性化を担当、同時に地域の自然普及啓発活動に参加。2010年4月、(公財)日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリにレンジャーとして着任、現在に至る。日本口承文芸学会会員。

注2 モジュール体 (modular organism)：たとえば樹木のように、一年目の枝 (シュート) の集合体としてできており、これらは、それぞれのシュートが局所局所で自律的にふるまうと同時に、樹木の個体全体として調和がとれたふるまいを見せる場合もある。こうした基本的単位 (モジュール) からなる構成体をいう。